疏通千里・利澤萬世
――生命を育む明治用水

明治用水の実現

明治13年（1880）ついに「明治用水」は完成を見る。3月には「明治本流」が、5月には「中井筋」と「東井筋」が、翌年には「西井筋」が完成した。総延長は約52km、県は引き続き支流約40本の開削を続け明治18年には、ほぼ現在の明治用水の姿となった。民間の着想と資金調達だけでこの歴史的大事業を成し遂げ、不毛の原野は次々に開墾されて美田となり、今日の農業の基盤を築くことになった。

明治川神社前の明治用水開渠記念碑には「疏通千里・利澤萬世」（松方正義書）と刻まれている。明治用水は、まさに言葉どおり、水路の開削によりこの地域に永遠の恵みを与えてくれた。

鹿乗川

矢作川右岸に沿い低地部を流れる鹿乗川は、明治用水のかんがい区域の一部を含む流域面積4,300haで、排水状況が悪く、しばしば湛水被害を受けていた。鹿乗川は現在の安城市木戸町地内で、矢作川に合流していたものを天野金右衛門・加藤吉右衛門らの尽力により、天保9年（1838）に下流部の寺領・藤井の高台地を掘削して、西尾市米津町で矢作川に合流させる工事が完成した。

この地域は、鹿乗川沿岸用排水土地改良区の管理運営であったが、昭和47年８月に当土地改良区に合併した。

旧下佐々木取水口

旧北野用水取水口

日本デンマーク
――碧海大地の躍進

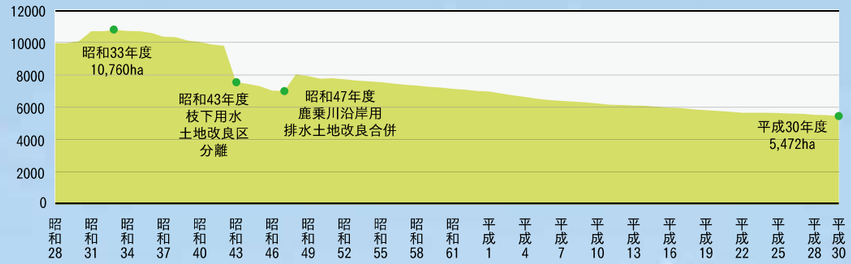
受益地の推移

この地域の農地は、明治用水開削前の約2,300haから、3年後の明治16年（1883）には4,300haとなり以後、毎年150haほどずつ増え続け、27年後の明治40年（1907）には8,000haを超す一大穀倉地帯へと画期的な転身を遂げた。

その後も受益面積が拡大し昭和33年には10,760haまで農地が増え、大正末期から昭和初期にかけて安城を中心とした碧海郡は「日本デンマーク」と呼び名がつくほどに全国の賞賛を集め、優良農業地帯へと発展を遂げた。しかし、昭和30年代中頃から始まった高度成長期には、自動車関連企業の大々的な進出があり、また、各市で土地区画整理事業が施行され景気拡大、人口増加に伴って大型転用が増大し、受益面積が著しく減少し、現在はピーク時の半分となった。

平成30年の受益面積は、5,472ヘクタール、組合員数は13,067人、1戸当たりの経営面積は0.4haで比較的小規模である。組合員の多くは非農家であり、農業経営は担い手による受託農業が盛んである。

平成30年４月１日現在の受益面積(ha)及び組合員数(人)

市別	安城市	豊田市	知立市	刈谷市	高浜市	碧南市	西尾市	岡崎市	その他	計
受益面積	3,101.1	277.9	354.9	643.7	171.0	261.7	155.7	506.8	－	5,472.8
組合員数	6,174	715	984	1,733	612	583	693	1,229	344	13,067

受益面積推移(昭和28年～平成30年)